

大好きな剣道のため

北海道

砂川錬心会

中学1年 土田 奈々

剣道との出会いは四歳で、兄の影響で剣道というものを初めて目にして興味を持ち、五歳から習い始めた。最初の頃は、鬼ごっこやリレーなど、遊びながら体を動かすことから始まり、内容も楽しく年の近い子が多かった為に、毎日稽古に行くのが楽しみだった事を覚えている。

砂川錬心館は、入門してすぐのCグループから特錬Aの五段階に分かれている。

基本の時は、先輩達の素早い動きで相手と稽古している姿を見て憧れていた。

しかし、いざ特錬に上がってみるととても苦しい稽古ばかりだった。打ち込みやかかり稽古など、休む暇なく先生方や先輩方に向かって行き心身共に辛かった。

始めた頃とは違い、「稽古に行きたくない、稽古が楽しくない。」と毎日思っていた。

四年生になり初めて大きな大会の選手に選ばれた。それまでは錬成会や近隣の大会にしかなかったことがなく、補欠ばかりだったので、選手になって「剣道が楽しくない！」という気持ちが一気に変わった。

先生からは、「団体戦の次鋒が強いチームは手ごわいぞ！」と聞き気合が入った。

初めての大きな大会で初戦から緊張し、足が全く動かなかった。楽な試合などなかったが、負けたくない思いで必死に戦っていると、あっという間に決勝戦だった。会場には応援してくれた先輩や先生、観客席の親の期待を考えると、更に緊張したが、試合場に入ると冷静に集中でき、結果は二本勝ちでチームも優勝出来た。選手として初めてチームの役に立てた事が嬉しかった。

その後の大会でも砂川に優勝旗を持ち帰ることが多くなり、力がついていることが実感できた。剣道は、一人で戦うのではない。いつも共に汗を流している仲間の存在の大きさを気づかせてくれた。その頃から剣道が「楽しい！」と思うようになった。

先生から、「打って反省、打たれて感謝」という言葉を何度も聞いて育った。

打ったり、勝ったりすると、「今回はここの打ちが良くなかったな。じゃあ、次はこうしよう。」と反省し、逆に、打たれたり負けたりすると「ここが弱いから、次はここを工夫しよう。」と打たれた相手に弱点を教えてもらったことを感謝しながら稽古を続けた。

新型コロナウイルスが流行し、学校や稽古が休みになり、やる気が出てきた矢先だったので、じしゅく期間が長く感じた。

満身に稽古や大会に参加できずに、あっという間に六年生になった。そんな中、スポーツ少年団剣道交流大会があった。満身に稽古が出来ない状況での参加だったが、仲間達との絆

のおかげで優勝することができた。

三月の高知県での全国大会は残念ながら中止となり、かなり落ち込んだが「次、頑張ろう！」という仲間の言葉で、気持ちを切り換え次に進む原動力となった。

中学生になり、新型コロナウイルスの感染拡大が少し落ち着き、学校や剣道に行くのが日常になった。変わらず剣道は大好きだったが、剣道以外の事で心に変化があった。

「自分は人からどう思われているのだろう。」

「友達は自分の事を嫌いなんじゃないか。」

など、なぜか毎日不安だった。それを救ってくれたのも仲間だった。

「そんなの気にしなくて大丈夫。」

その言葉一つで心が軽くなった気がした。

学校や剣道の仲間、先生方、家族、多くの人に支えられていることに気づいた。

剣道を通して得た一生の宝物だ。その気持ちを大切に、これからも剣道を通してたくさんの宝物を見つけて行きたい。

自分の大好きな剣道をもっと色々な人に知ってもらい、好きになってもらいたい。

そんな夢を持っている。そのために、「自分に出来ることは何か。」を考えながら剣道が続けていこうと思う。